

## カントにおける前成説と後成説

「自然史」概念の理解に向けて

氏名 李 明哲(神戸大学)

西洋近代で批判哲学を打ち立てたプロイセンの哲学者イマニュエル・カント(1724-1804)は、雑誌『ドイツ・メルクーア』の1788年1月、2月号に掲載された論文「哲学における目的論的原理の使用について」で、有機的存在者の産出や組織化に関する議論において、同時代の自然人類学者ブルーメンバッハに賛意を示す(cf. VIII180)。

さらに『判断力批判』(1790)第二部「目的論的判断力の批判」§81では、再度ブルーメンバッハの名を挙げながら彼が貢献したとする「後成 Epigenesis」説を取り上げ、「[略]理性はすでに最初からその説明の仕方に格別の好意を寄せるであろう」(V424)と、後成説に賛意を示す。後成説とは、生命の器官や組織は徐々に発生・形成されていく考え方であり、予め発生前から内在する原型が展開されていく「前成 Präformation」説の考え方は、対の関係にある。

しかし実際のところ、カントは1770年代から批判期にかけて、「萌芽 Keim」や「自然的素質 Nature Anlagen」などの概念を多用しており、それらが持つ生得的なニュアンスから、カントは最後まで前成説的であった、という指摘もなされている(cf. Zammito2003 etc.)。一体どのような意味でカントは、後成説の立場を表明したのであろうか。

まず考えなければならないのは、「後成説の体系は、種的(類的) generisch 前成説の体系とも呼ぶことができる」(V423)とカントは二つの立場を独自の言い回しで言い換え、それとは区別される「個体的前成説」を「超自然的な措置」を含むという理由で否定する点である(cf. ibid.)。

そもそも「目的論的判断力の批判」では、有機的存在が発生する機械論的メカニズムとは別に、なんのためにその有機的個体ないし組織が存在するのかという目的論的問いが念頭に置かれている(cf. §65-67,81)。その意味では、たしかに有機的個体ごとに内在する原型が展開するだけなら、個的前成説となってしまう。それゆえ人類を含めた諸生物が「種(類)」として、維持・繁栄する理由を示すために、「種的前成説」に賛同したとも考えられる。

さらに、後成説を種的前成説と言い換える理由をカントは、次のように説明する。「生殖するものの産出的能力は、それゆえこの種別形式 die spezifische Form は、それでもこの種 Stamm に与えられた内的な合目的素質にしたがって潜在的にあらかじめ形成されていたからである」(V423)。

ここでは、一つの形式としての「産出的能力」が、種に与えられた合目的素質に従って、潜在的に形成されたと説明される。つまり、産出の目的としては種レベルで語られながらも、個体それぞれの産出のメカニズムもまた語ることができる。ただしそうであれば、後成説とは、目的論にメカニズムを伴わせるためだけの役割ということになるのだろうか。

本発表ではこれらの問題を以下三つの観点から考えたい。第一に、そもそも前成説か後成説かという議論が、西洋近代博物学の文脈でどのような意味を持つのか、その要点を整理する。もちろん、生命の起源をめぐる議論は古代にまで遡るだろうが、生殖や遺伝にかんする数多の解剖学的発見を踏まえ、本格的に後世に大きな影響力を持つことになった17世紀以降

から、カントが執筆活動を盛んに行った18世紀末までの文脈を整理する。そこでは、直接支持を表明されたブルーメンバッハだけでなく、デュフォンやモーペルテュイからの影響、同時代の論敵ヘルダーとの緊張関係などが重要となってくる。

第二に、このような生命の発生学的議論は、カントにおいてはもちろん、有機的存在の考察と関わるが、そこには同時にカントの「人種」概念に関する言説も関係する。というのも、既述した「萌芽」や「自然的素質」などの諸概念は、人種に関する言説で多用されるからである。ただし本発表は、カントが人種概念を語った理由ないし現代から見た際のカントの人種差別的叙述を問うものではない。人種概念を通して展開された諸概念が、後成説か前成説かという発生学的議論の理解に深く関わることに重点を置く。

さて、上記二点を踏まえた先行研究は、すでにある程度の蓄積があると言える。例えば、カントの後成説支持および人種言説に関するテキストを読み解きながら、同時代の博物学者たちとの論点の異同に焦点を当て、カントの生物学史的位置付けを探るタイプの研究である(cf. Zammito 2003, Hunneman 2007, Goy 2014 etc.)。本発表は、これらの研究蓄積をできる限り活かしながらも、より一層、カント内在的な解釈を目指す。

他方、上記のような生物学史的な分析を踏まえつつ、さらにそこから「理性の後成説」(B167)発言をいかに解釈するかなど、批判哲学そのものへの影響を見出そうとする研究群も存在する(cf. Zöller1988, Sloan 2002, Mensch2013 etc.)。これらの研究は、意欲的ないし挑戦的である一方で、後成説などの生物学的用語をカントがアナロジーとして拡張的に使用している問題に正面から取り組むという困難がつかまとう。本発表ではむしろ、まずは後成説という言葉が本来持つ発生学的議論に対して、カントがどのような意図でコミットしたかの解釈を優先させる。

そこで本発表では、第三の観点として、後成説か前成説かというカントの発生学的立ち位置が、有機的存在の起源に関する「自然史」概念理解に結びつく点を示したい。そのためには、(後成説を種的前成説と言い換える理由で登場した)「種別形式」という概念と合目的性概念の関係を踏まえる必要がある。

そもそも「種別形式」という概念は、『判断力批判』序論から継続して語られる概念である。そこではまず「自然の形式」とは、悟性によるアプリアリな法則には規定されない、きわめて多様なものとして登場する(cf. V179f.)。さらに自然は、合目的性の原理に従って、自らを「種別化」するものだと想定される(cf. V185f., XX214f.)。そしてわれわれは自然の種別形式のものではなく、その諸形式間に「合目的性」を判断する(cf. XX216)。これらを見るだけでも、種別形式とは、産出のメカニズムを担保するだけではなく、合目的性を判定するための独自の役割を担っていることがわかる。

さらにカントは、またもや種別形式を契機として、有機的存在者である「自然目的」という概念から、一つの体系としての「全自然」の理念が導かれることを説いている(cf. §67)

このような種別形式こそが、カントが後成説と種的前成説を結びつける根拠となっている。これらの議論を吟味することで、最終的に、カントの有機的存在の起源に関する「自然史」概念の理解を深められることを示す。